

→門跡覚慶が新將軍となった矢島御所を訪ねる

2021.11.14 日（日）カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第563回 参加報告

さて、この地は元来、裕福な土地らしい。それがよく分かるのが大庄屋諏訪屋敷である。屋敷の北側に、弘法大師・空海が掘りあてたという閼伽井（湧き水の井戸）があり、夏には満開の蓮の花が見られるそうである。その閼伽井の前に、大庄屋諏訪屋敷の脇門が開けている。



諏訪屋敷にて

屋敷の北側に水路（釈迦堂川）が穿たれていて、昔は屋敷と琵琶湖との間を船で渡って通行していたそうだ。矢島新御所からここまでも、道沿いは穀倉地帯であった。縦横にやはり交通のための水路があり、いまでも農作で忙しそうな様子である。

大庄屋諏訪屋敷は、敷地 4000 m²の広大な屋敷である。主屋と書院からなり、入り口を入ると「おもてにわ」と呼ばれる土間、そして畳の部屋へ上がると「だいどこ」「かみだいどこ」「なんど」「おいま」「仏間」とつづき、「つし」から合掌組の分厚い屋根が見られた。奥の「書院」は入母屋造りで、こちらも茅葺き屋根。玄関には式台が付設され、玄関座敷、中座敷、奥座敷へと続く。池泉回遊式の庭園の奥にある茶室は、明治になって大津の円満院から移築したものだそうで、江戸前期の茶室建築として隠れた秀作であるという。その茶室の脇に、釈迦堂川からの船入口があり、今は使っていないようだが、かつてはここから船で出入りしたことがうかがえる。

こんな立派な屋敷の主になり、土地を耕し経営したのは信州諏訪から永正年間(1500年頃)に移り住んだ諏訪左近将監長治という人だそうだ。この屋敷がある赤野井村は、江戸時代に淀藩の近江国内での飛び地領地となり、諏訪家はそこで大庄屋を務めた。赤野井村は、空海の閼伽井などのふんだんな湧水を使って農地を広げ、ますます繁盛したのだろう。それが分かるのが、西本願寺・東本願寺の別院など、大寺院がすぐ近くに薨を並べていることである。繁盛するところには、寺院が寄ってくるのだ。

そんな経済力に、門跡覚慶も支えられたのだろう。六角義賢の命によって土豪・矢島越中守が急遽建てたという「矢島御所(矢島館)」に入り、永禄9年2月に還俗し、足利義秋(義昭)と名を改めた。7か月後の同年9月には三好長逸の乱があり六角氏が裏切り、義秋はこの館を去る。レジュメに入れられた水上勉さん自身の「生い立ち」の、故郷・若狭を離れる下りが重なり、余計に義秋の悲しみが増幅した。紙幅が許す限り抜粋を再録しておこう。



諏訪屋敷茶室

「……大雪の日だった。二月十八日。私は、西安寺の和尚さまと父につれられて京へ向かった。岡田部落から本郷まで一里近い雪道だったが、京へゆけば、こんなワラ靴は履かないですむ、といいながら履かされた深靴をはき、父のトンビの仕立て直しであったマントを着ていた。……」

(水上勉作「わが六道の闇夜」より)